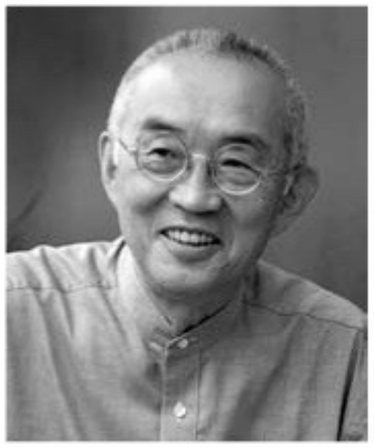
Point of View

消滅言語を救済するAI



月尾　嘉男

最近では消滅しそうな言語を存続させる努力が活発である。例えば「アイヌ語」の流暢な話者は一桁程度しか存在しない。いずれも言語系統としては孤立しているので、維持や継承は容易ではない。そこで登場してきたのが人工知能によって消滅が憂慮される言語を維持しようという手法である。

南米大陸南端のケープホーンには3回出掛けたことがある。1回は大型客船での航海あるが、2回はカヤックでケープホーンを周回するためである。一帯は有名な航海の難所で、これまで数千の船舶が難破したとされ、南端の港町プエルト・ウイリアムスの博物館内に判明している難破地点を表示した地図が掲示してあるが、恐怖の海域である。

ここには2万年以上前にアジア大陸からベーリング海峡を横断して北米大陸に到達したモンゴロイドが延々と南下して6000年前に到達したヤーガンと名付けられる民族が生活していた。その最後の一人でヤーガンの言葉を使用できる女性に筆者は面会したことがあるが、2022年に死亡し、ヤーガンは民族として消滅した。

この女性の死亡はある民族の消滅と同時に、ある言語の消滅を意味する。現在の世界には7000程度の言語が存続しているが、一定の人数が安定して使用している言語は半分程度で、それ以外は日常に使用される言語としては消滅の危機が憂慮されている。さらに世界の人口の九割は約100の言語で生活しているので、消滅の危機は加速する。

この状況は多様な言語の話者が相互に意思疎通するには不便であるうえ国際交流の阻害要因になっているとの見解から、19世紀末期にポーランドのL・L・ザメンホフが世界共通で使用できるエスペラントという言葉を発明したが、現在、世界で使用できる人数は約200万人と推定され、期待のように世界に普及することはなかった。

しかし最近では消滅しそうな言語を存続させる努力が活発である。オーストラリアの先住民族アボリジニは広大な国土に分散して生活しているため約600の言語を使用していた。現在は約150に減少しているが、約100は消滅の危機に直面している。そこで英語もアボリジニの言葉も同様の価値があるとして政府が存続の努力をしている。

日本にも類似の活動がある。南西諸島の八重山島には「八重山語」、与那国島には「与那国語」が存在するが、前者は約5万人、後者は約400人しか話者は存在せず、前途が危惧されている。さらに深刻な言語は「アイヌ語」で流暢な話者は一桁程度しか存在しない。いずれも言語系統としては孤立しているので、維持や継承は容易ではない。

そこで登場してきたのが人工知能によって消滅が憂慮される言語を維持しようという手法である。「アイヌ語」については音声情報を人工知能に深層学習させて意味を認識し、音声合成で発音できる技術を京都大学が開発している。グーグルは物体を撮影した画像を人工知能が認識し、名称を消滅危機言語で発音するソフトウェアを開発している。

情報は後出の類似の情報には価値がないことが明示するように、本質は相互に相違していることで、その結果としての多様が最大の価値になる。最近ではスマートフォンで言語を瞬時に翻訳する技術が登場し、便利ではあるが、人間が多様な文化を保持することを阻害する技術である。言語の使用が人間の本質であることを確認すべきである。

つきお・よしお　1942年生まれ。東京大学工学部卒業、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て、現在は東京大学名誉教授。